
大学生とアイデンティティ形成

—発達論的規範化を超えて—

岩川幸治

大学生を送るにあたって、学生が判断をしなければならない局面を迎えることは多い。それは、大学生として過ごす期間が、大人への移行期間を意味し、学生自身が自分をどのように位置づけ、アイデンティティを形成していくのが重要な課題となっているからである。エリクソンによって提唱されたアイデンティティは、発達論的規範と合致し、大学生を表す概念として定着した。発達論的規範によって、大学生を特定の型にあてはめて解釈することが当たり前ようになったが、変化の激しい社会を生き抜くための適応パターンとして、今一度アイデンティティ概念を読み直していかなければならない。

大学生は大学という場によって大学生になるため、学生の意識や行動を大学という構造との関わりから捉えることが重要である。本稿では、人間関係の質に注目し、それが学生のアイデンティティ形成にいかに関与を与えるかを考察する。特に大学外で築く人間関係に焦点を当てて、その質の意味から、大学における教員と学生との関係のあり方を逆照射する。限定的で深い関係を学生が築くなかで、自己意識に内面化されない〈他者〉の存在を絶えず喚起できるように、教員と学生との関係を築いていくことが、学生のアイデンティティ形成の一步となるであろう。さらに、学生のアイデンティティ形成の場として「コミュニティとしての大学」の役割も期待される。

キーワード：大学生、アイデンティティ、人間関係

1. 大学生と判断をめぐる問題

何か判断をしなければいけない局面を迎えたときに、大学生はどのように判断するのだろうか。この問いが成立するには、いくつかの条件がそろわなければならない。

そもそも、大学という場が無ければ、大学生は存在しない。大学生が大学生たりうるのは、入学から卒業までの限られた期間である。大学に入学した動機や入学する大学を選択した理由、大学生生活の過ごし方、卒業後の進路など、大学生として過ごすにあたって判断を求められる場面は多い。ほんの些細なことから、人生を揺るがす一大事まで、その都度、判断をしながら進むべく道を選択していく。些細なことであれば、さほど問題にはならないであろうが、人生の転換点になるようなことだとそうはいかない。まず、大学生が人生の転換点に差しかかるというテーゼが、先の問いが成立する第一の条件となる。「人生の転換点」とは、転換点とそうではないことを区別する状況を

表し、このことが判断と密接に結びついていると考えられる。さらに、何が転換点になるかどうか、人によって異なるため、判断をめぐる問題はますます複雑な様相を呈する。大学生を送るうえで大学生が自分自身をどう位置づけるのか、を明らかにすることで、複雑に絡み合った糸を解きほぐすきっかけになるだろう。

位置づける自分が存在する一方で、位置づけられる自分も存在する。つまり、大学生に関心を寄せる社会的文脈によって大学生は位置づけられていく。これが大学と判断をめぐる問いが成立する第二の条件である。大学生に対して肯定的なイメージが付されると、大学生は自ら考えて判断できる存在として、さほど話題にはならない。それとは逆に、否定的なイメージが付されると、大学生に向けられる視線が、判断することとは相容れないメッセージとなって表れる。大学生は、理解できないもの、問題があるものとして映り、そのイメージに対する何らかの疑義が社会的位置を占める。そして、他とは異なる問題のある存在として扱われ、あるべき理想像を背後に携えた言説がカタどられていく。大学全入時代の到来は、学力が低く、学習意欲に乏しい大学生を誕生させ、いかに学力を向上させるのか、学習意欲を引き出すのが課題となる。こうして描かれる大学生像は、ステレオタイプ化され普及していく。大学生に対する否定的なイメージは、望ましいとされる役割を大学生が身につけて自己規定するように要求する。もしもその道から外れるならば、大学生は批判の対象となり、判断できない大学生の自己責任論へと転換されてしまう。ここで問題となるのは、社会的文脈において他者から期待される役割を、大学生が自己規定するさいに内面化する／しないということと、大学生の判断とがいかに結びつくのかということである。判断が自己肯定感と結びつくと、アイデンティティ獲得へと一歩近づくとと思われる。そこで、社会的文脈において大学生が大学生としてカテゴリー化されるなかで、何を準拠枠にしてアイデンティティを形成するのか、具体的な場面に即して考える必要がある。アイデンティティ概念に注目するのは、それが大学生の自己を規定する中核として、重要な役割を担うようになったと考えられるからである。

以上のことから、大学生の判断をめぐる状況を成立させる要件として、大学生がアイデンティティを形成する基盤となる構成要素について検討したい。まず、大学生がアイデンティティ概念によって成立するようになった経緯を歴史軸に沿って整理し、アイデンティティに与えられた意味を明らかにする。次に、大学生がいかにアイデンティティを獲得するのか、大学生が築く対人関係の質から検討する。そのさい、大学外で築く関係に注目し、大学が学生とどう関わっていくのかを考えるきっかけとする。最後に、教員と学生との関係に焦点を当て、大学がいかに大学生のアイデンティティ形成にとって意味のある場となるのかを考えたい。

2. アイデンティティに与えられた意味

大学生とはどのような存在なのであろうか。大学生の存在を一躍有名にしたのは、アイデンティティ概念の浸透によると考えられる。大学生がたどるライフコースが、アイデンティティと密接に結びつき、大学生として過ごす時期が自己を確立する重要な時期として位置づけられた。大学生は、大学という枠組みだけで規定されるというよりも、青年から若者へと語られ方が変遷するなかで、

固定化したイメージを獲得した。

高校「倫理」「現代社会」の教科書では、青年期を説明する語彙として、アイデンティティ、モラトリアム、自己などが一番多く使用されており、これらは人名での使用頻度が高いエリクソンの理論を中心に説明されている(渡部 2002, 2005)。また、大学における青年や若者に関する講義においても、アイデンティティ、モラトリアムの用語を用いて、専門的に解説されることが多い(渡部 2005)。エリクソンの提唱したアイデンティティが、青年期を表す中心的な概念になっている以上、エリクソンのアイデンティティがどのような意味をもち、どのように使われているのかを知ることは極めて重要である。そこで、青年期がアイデンティティ概念によって成立するようになった流れをたどり、アイデンティティに込められた意味を明らかにする。

エリクソンは発達段階の諸相を八つに分けて、その心理-社会的発達の筋道を描く(Erikson 1963=1980)。青年期は、周囲から求められる理想的なモデルに同一化するのではなく、自分とは何者かを問い、アイデンティティの確立を模索する時期であるとした。アイデンティティは、わたしは何者であるかという自己意識をめぐる「個人的同一性」と、わたしは誰であるのかを社会や他者から承認されているという意識である「社会的同一性」から成り立つ。アイデンティティはたやすく確立されるのではなく、不安定な探索の過程を経るがゆえに、アイデンティティが拡散するという事態を招いてしまう。ここで注意しなければならないのは、発達課題は一度達成されてしまえば安定するといった静態的なものではなく、アイデンティティの統合か拡散かという両極状態がせめぎあう動態的なものであるということだ。アイデンティティを獲得した状態とは、統合と拡散とのせめぎあいのバランスにおいて、前者が後者を上回るパターンを、ある程度持続的に確立しているにすぎない(児美川 2006)。

青年期の発達課題を乗り越えられるかどうかは、青年期以前の発達課題をどのように乗り越えてきたかに規定される。つまり、青年期より前の発達課題が達成できていれば、アイデンティティの確立という青年期の発達課題は比較的スムーズに遂行されるであろうが、そうでなければ、困難を伴う可能性が高い。このように、発達課題は一つの発達課題を完遂し次の課題へ移るといったような単純な時間的継起ではなく、次の発達段階に影響を与える、全体としての「機能的な統一性」を形成しつつ発生するのである。

では、日本においてエリクソンのアイデンティティは、どのように受け入れられたのであろうか。きっかけは、1960年代後半に起きた学生反乱に遡る。この時期に日本では相次いで『主体性——青年と危機』(岩瀬庸理訳, 1970年, 北望社)『青年の挑戦』(栗原彬監訳, 1971年, 北望社)など、エリクソンの著作が翻訳された。エリクソンの理論を取り入れ、当時の反抗世代の若者たちを理解する参考枠にしようとする問題意識が、研究者のあいだで形成されつつあった。その後、学生反乱の熱気が冷め、若者たちが急速に非政治化し、内向化した1970年代半ば以降になると、エリクソンの理論が日本で社会的な脚光を浴びるようになる。小此木は「大人になれない」「大人になろうとしない」若者たちの心性を捉えて、モラトリアム人間が誕生したと説明した(小此木 1978)。また、笠原は学業に対する意欲を無くしてしまい、無気力状態に陥った学生を、スチューデント・アパシーと呼んだ(笠原 1977)。このように、日本に輸入されたエリクソンの理論は、問題と化した青年間

題を説明する原理として援用され、青年論を補強する重要な装置となったのである。さらに、青年問題の説明に加えて、青年を社会に統合するにはいかにして可能となるのか、アイデンティティは発達論的規範や施策的色彩を帯びるようになる。青年自身ではなく、大人の側から「問題とされる青年」に対する「理想としての青年像」が示され、「一貫したわたし」を目標にして青年論は展開されたのであった。

1980年代に入り、消費社会が到来し、情報化が進展するなかで、特有の消費行動やサブカルチャー・ブームを担い、メディア文化を形成した若い世代のライフスタイルや価値観が対象となる。「異星人」(中野 1985)と称された新人類の登場は、まさに若者文化を生きる若者の象徴として注目を浴びた。商品と情報がファッション化するなかで、若者は消費センスや個性を競い、「感性のエリート」を目指した(城戸 1993)。政治や社会にシラケを感じている若者は、外面的には社会的役割を引き受けながら就職し社会へと参加していったが、自己の内面にモラトリアム気分を維持させ、大人との価値意識の切断を保とうとした(溝口 2004)。栗原は、この現象を、青年期に役割実験を行うモラトリアムは機能不全に陥ってしまい、「内面化されたモラトリアム」「二重意識」の表れと捉えた(栗原 1981)。具体的には、記号化されたモノによって自己表現をし、自己の差異化をすすめることで、自己を規定したのである。青年期は、試行錯誤しながら自らの方向性を決定する自由な役割実験の時期ではなくなり、エリクソンのアイデンティティ概念は時代にそぐわないものになった、と栗原は見ている(栗原 1981)。エリクソンの手から離れたアイデンティティは、市民権を得た青年期に特有な社会的性格である「一貫したわたし」からは距離をとり、社会構造への組み込みから自己を解放する方向へと進んでいった。

1990年代以降になると、モラトリアム的性格や指向は、ニート、ひきこもりなど働かない若者の病理的側面を強調するものとして、引き継がれていく。しかし、フリーターや派遣労働など不安定雇用のなかで働く若者は、経済的な自立が難しく、親に依存した生活を送らざるをえない状況におかれていることが多い。この背景には、社会のメイン・ストリームに参入することができず、「縁辺化」される若者が増加しているという問題があり(中西 2004)、若者の社会的地位は揺らぎ始めた。みずからの将来を展望するのが難しくなっているなかで、大学生のアイデンティティ形成は不安定になり、また葛藤に晒され、価値志向や意識は「現在」を中心として、いかに今を生きるか・過ごすかが重要な課題となる。宮本は、大学から職業への移行が不安定化し、「大人への移行」のプロセスそのものが困難になった結果、半依存・半独立状態が長期にわたり続く「ポスト青年期」というライフステージが登場したと指摘する(宮本 2004)。また、ポスト青年期は成人期へと続く移行的性格をもった時期でもある(宮本 2004)。ポスト青年期が成人期との連続性を想定させるような段階として設定されると、「縁辺化」される若者の問題は移行できない若者個人の責任に帰され、問題の深刻さを曖昧にしてしまうかのように見える。モデルとなる普遍的な大人像を想定するのが難しい状況において、どうしたいのか、どうしなければならないのか、自分で考えて判断していかなければならない。

エリクソンの理論が受容されたのは、「アイデンティティ拡散」に重きを置くと同時に、ライフサイクル全体なかでの「青年期」の特性であるという枠を、曖昧にする形で援用されたためである

(児美川 2006)。発達論として機能したエリクソンの理論は、容易に社会適応に転化するという本質の特徴を有することで、青年問題を理解する方法として、また青年のあり方を示すものとして、その意義が見出された(山下 2008)。そのなかでアイデンティティは、社会構造の組み込みから距離をとろうとする若者が自己規定する概念として定着したのである。上野(2005)は、社会システムに自らを完全に同一化することから降りた若者の姿を掴まえ、有効期限切れとなった「アイデンティティ」から脱却を図ることが有効だと指摘する。だが、ここでエリクソンのアイデンティティ概念が、明確には定義されていないという点に注意を払わなければならない。なぜなら、エリクソンは、アイデンティティという概念を、あらゆる場面で、あらゆる文脈で使用されて、はじめて成り立つ概念だと考えていたからである。つまり、アイデンティティは、固定化された意味をもつのではなく、読み替えが必要な柔軟性を有する概念なのである。

では、アイデンティティを読み替えるには、どのような戦略が必要であろうか。西平は、「アイデンティティを〈統合した状態〉としてではなく〈統合をめざした絶えざる動き〉として、いわば、名詞としてではなく動詞として、統合された〈もの〉ではなく統合してゆく〈こと〉として」(西平 1993: 191)読み直す。アイデンティティとは隙間のない一枚岩のような「一つのもの」ではなく、ズレを持ち続ける〈何かと何かのアイデンティティ〉なのである。ズレはあくまでズレとして持ちこたえながら、それを受け入れ〈何かと何かのアイデンティティ〉として統合してゆこうとする動きとして、アイデンティティを何かと何かの二重構造として読むことが鍵となる(西平 1993)。また、統合か拡散か、この二つの項目は別個のものではなく、むしろ同じ一つの心理的社会的特質が、親和的に感じられる場合と、違和的に感じられる場合とに言い分けられた違いなのである(西平 1993)。

今、求められるのは、固定的な意味を獲得したアイデンティティ概念を観念レベルから解放し、文脈レベルにおけるアイデンティティの位置づけから、いかにアイデンティティの感覚を持つ素地が築かれるのかを検証することである。アイデンティティという感覚を持つということは、学生のアイデンティティを揺るがすような事態が何らかの形で存在するということの裏返しだと言える。児美川が指摘するように、これまでのように、アイデンティティは、モラトリアム、スチューデント・アパシーなど、乗り越えるべき課題を克服するという発達論的規範を残しつつ、一方で変化の激しい社会で生きていくための適応パターンとして、アイデンティティを肯定的に読み込んでいく可能性を模索していかなければならぬだろう(児美川 2006)。あくまでも、発達論的規範は、若者批判の材料ではなく、現在の若者が置かれている状況を知る手がかりとして効力を発揮する。

3. 大学外の準拠集団にみるアイデンティティ形成

アイデンティティが青年論から若者論へと引き継がれ、若者に対する理想を伴った概念として受け入れられると、現実との違いから容易に大学生否定論へと結びついてしまうだろう。浅野は、実証的な裏づけがなされないまま、若者に対して付された否定的なイメージを相対化し、肯定的な要素を読み取っていくために、若者像を描き直す必要があると指摘する(浅野 2006a)。ただし、肯定

か否定か、どちらかに収斂した大学生像が描かれるのであれば、大学生は偏ったイメージでしかない。印象論的な大学生論を超えるには、学生の意識や行動を大学が提供する教育をはじめとする諸環境との関係で分析することが重要である。そうすることで、学生の意識や行動を大学という構造との関わりから明らかにできる。大学の構造を支える指標は、大学生活において学生が会う様々な場面や経験と重なりあう。大学が学生個人に直接影響を与えるというよりも、大学と学生とのあいだに介在する様々な組織や集団、文化や教育実践を通じて、学生は社会化されていく。その規定関係を研究してきたカレッジ・インパクト研究は、学生の属性、親による社会化、大学経験、大学外の準拠集団の4つを指定し、就職だけではなく、ライフスタイルや価値観などを含んだ幅広い観点から、学生の社会化に影響を与えるメカニズムを明らかにした¹⁴⁾。

アイデンティティを確立しようとする過程には、その先に見据えた目標へと進むことで自己肯定感を得たいと思う心理が働く。何らかの形で自己肯定感を見出そうとするからこそ、アイデンティティが問題になるといえるだろう。そこで、大学生が築く人間関係に注目し、いかに大学生がアイデンティティを確立していくのかを考えたい。そのさい、大学というフィールドに学生を載せ、大学を起点にして学生の自己規定について考えることは避けたい。大学外の準拠集団を手がかりに、大学生が何を求めているのかを明らかにし、大学というフィールドがいかに学生の社会化の場となるのかを検討する契機とする。

ところで、大学生にとって学業が大きな意味を持っていることは看過できない。学業への満足度は、大学生の自己評価に大きな影響を与えており（溝口 2001, 全国大学生協組合連合会 2008）、学業に取り組む必然性をいかに見出すかが重要となる。大学で勉強すると意気込んだはいいが、具体的に何をしたいのかわからないままであれば、何となく授業を受けるだけの単調な毎日の繰り返しになってしまう。また、入学前に抱いた期待と現実の大学生活とのギャップが大きければ大きいほど、自己評価が低くなる原因になりかねない。そもそも、何となく入学してしまい、大学生活に意味を見出せないまま過ごすこともあるだろう。いざ進路を考えなければならぬ時期を迎えると、今まで何をしてきたのか、無為に時間を過ごしてしまった自分に不安や焦りを感じてしまい、自己を振り返り、向き合わなければならない。追い討ちをかけるように、やりたいことが見つからず目的が定まらなると、自己喪失感が増していく。自分の生き方のビジョンを見定めるという作業を必要とするといえるだろう。

学生が自己喪失感を持たずに大学生活を送れるように、また社会に出られるように、大学は多様なニーズに応えるべく体制を整えて、学生の社会化を手助けする。大学という狭い空間で完結するのではなく、大学外で多くの人と出会い、多様な経験を積み、自己研鑽する場を提供できるように、積極的な取り組みが行われる。ボランティア活動は自己肯定感を見出せそうな場として機能する。ボランティア活動を通じて、何かをしたいという漠然とした思いは、ボランティア活動をすでにしている大人から、何ができるか、それにはどういう意味があるのかが導かれる（原田 2006）。ボランティアは、「正しい道に進んでいる」という目に見える形で意味を与えてくれるからこそ、自己肯定感へと結びつく。また、すばやく、効果的に、自分の行動結果が表れるという特徴も行動するうえで、重要なポイントとなってくる（片桐 2009）¹⁵⁾。実際に、ボランティア経験者による満足感の

調査では、「多くの人と知り合いになれたこと」「人間として成長できたこと」と回答したものの割合が高い(独立行政法人日本学生支援機構 2006, 片桐 2003, 経済企画庁国民生活局 2001)。ボランティア活動をする多様な年齢層の大人との出会いが魅力的に映り、ボランティアに自分の生きる道を見出す。自分の主張を具体化して実践しようとしている大人と関係をもつことに、学生は価値を置く。しかし、ボランティアをしている大人から認められたいという思いだけで、ボランティアをしているわけではないだろう。誰かに喜んでもらえるという充実感を味わい、楽しめる場としての機能もボランティアにはあると考えられる。つまり、人のためにというよりも自分自身のために行っているという側面が強いとも言えるのである。ボランティアは、「学校では学べない体験をして視野を広くもつ」「役に立っている自分」「必要とされている自分」「将来ありたいと思う自分」など自分の存在を確認できる絶好の機会となり、学生と社会との橋渡しとしての役割を果たす。

ボランティア活動の効果は、アイデンティティを調整、発見することにあるといえるのだが、自分とは立場や属性を異にする者と交流を図ることがポイントである。ボランティア活動で自己肯定感を見出せないとき、アルバイトなどの活動を通じて自己肯定感を得る方法を選択することもあるだろう。ボランティア活動やアルバイトは、立場の違う人と出会い、そこで異質な他者からの承認を得られるかどうか、学生のアイデンティティ形成に大きな影響を与える。では、年齢も近く、立場が対等に近い友人はいか学生のアイデンティティに影響を及ぼすのであろうか⁹⁾。

アルバイトは、立場の違う大人との関わりだけではなく、友人を得る場としても重要な意味をもつ。友人を得たきっかけとして、「アルバイト先で」と回答しているものが多く(内閣府政策統括官 2004)、アルバイトは、友人関係を学校や地域社会以外に広げる重要な役割を担う。また、「インターネットや携帯電話のサイトで」と友人を得ているものも一定数おり、インターネットや携帯電話などのメディアも友人関係を築く基盤となっていることがわかる(浅野 2006b)。このように、友人関係をつなぐチャンネルは多元化し、大学にとどまらず多くの人と関わりをもっているのである。そうであるならば、ここ数十年、若者の友人の数は、多くなりこそすれ減少はしていないという指摘には納得がいく¹⁰⁾。しかし、友人の定義が今と昔で変化しているかどうかを確認しなければ、本当に友人の数は変わっていないかどうか断言できない。また、数は変わっていなかったとしても、関係の質が変化していれば、友人関係の意味は異なってくる。

インターネットや携帯電話などのパーソナル・メディアが普及した結果、友人関係の意味は、これまでとは異なる様相を呈していると考えられる。パーソナル・メディアは友人関係を維持する重要なツールとなり、否が応でも、その影響を受けてしまう。だが、橋元(2005)は、メディア環境が大きな変貌を遂げているにも拘らず、友人関係に特段の変化がみられないことから、メディア自体が全体的友人を中心とする対人関係に大きな影響を及ぼすほどの力を持たないと指摘する。このことは、メディアがまったく影響を及ぼさないことを意味しない。そうではなく、メディアの使い方が問題なのである。橋元によるメディア利用と対人関係の関わりについての調査では、携帯電話をよく利用する者は、人との共感性が高く、現実体験を重視していることがわかった(橋元 2005)。また、携帯電話が特に親しい人のあいだでもっとも利用されているという調査結果から、携帯電話は不特定多数とのつながりを目的としてはおらず、相手を自発的に選択してつながる、多層化した

〈縁〉を前景化しているのである(松田2000)。辻(1999)は、ケータイ的なコミュニケーションの特徴から、対人関係に大きく拘束されたくない・オンオフの切り替え(フリッピング)を容易に保っておきたいという若者の性向を「対人関係の『フリッパー』志向」と呼んだ。具体的には、複数の中心点をもつ円が束ねられ、円と円との対人関係が中心点と中心点との結ぶつきであるような、部分的だが表層ではない対人関係が成立しているのである。

携帯電話を介した友人関係は、目的に応じた深くて限定的な関係を選択しているという特徴があるといえるだろう。関係の多様化・流動化に伴い、相手との関係を維持するには、様々なコミュニケーション・スキルを身につけなければならない(岩田2006)。状況ごとに関係を柔軟に使い分け、対人関係を築いていく。友人関係を取り結び、それを維持するためのチャンネルが相対的に多様化しており、状況志向を強めながらその内部で独特の繊細な感受性を育てているのである(浅野2006b)。若者の自己意識の不確かさは、このような自己の可変性や多元性によってもたらされているのであろう。

状況志向である多元的な自己を中心とした関係は、可能性を秘めていると同時に危うさも兼ね備えている。土井(2004)は、このような人間関係を、相手との関係性を維持するために、自らの感情に加工を施し「装った自分の表現」を最優先し、お互いに傷つけないように、傷つかないように、演技しあい、関係が破綻しないように配慮する、重さを伴った関係だと説明する。あまりにも親密圏の人間関係が重すぎると、関係の中身を吟味したり確認しあったりする余裕もなく、お互いにつながっている時間を消費していくのが精一杯になってしまう。親密圏の外部には意味ある他者が成立していないために、そちらに「表出」の感情が向けられてしまうという危うさを伴う。このような否定的見解がある一方で、浅野(2006b)は、自分らしさを基準にものと考え、かつ自分らしさを多元的でありうるものとみる姿勢を「開かれた自己準拠」と呼び、自己を複数の軸足で支えるという意味において強みにさえなりうる、とその可能性を見出す。否定的、肯定的どちらの側面もあることを踏まえておく必要があるだろう。

4. 教員と学生の関係によるアイデンティティ形成

学生はどのようなときでも自己を一貫して表現するのではなく、場面ごとに見せる顔を変えていると考えられる。「教員-学生」という関係も、それを可能にする状況が存在して初めて成立するといえる。まず教員、学生ありきで、それぞれの役割を身につけることを前提にした関係では、表面上は「教員-学生」という関係が成立しているかのように感じる。しかし、それぞれの場面で学生がどのような顔を見せて関係を築いているのかを理解しようとする視点をもっていなければ、自己完結した閉じられた関係に終始してしまう。そうならないためにも、他者の存在を知り、自己と他者のあいだでいかにしてコミュニケーションが可能となるのか、その要件を探し出す必要がある。

ただし、コミュニケーションが有する特徴の捉え方如何によっては、自己完結の枠組から抜け出せないということに注意しなければならない。具体的には、コミュニケーションは自己と他者とをつなぐ「共通するもの」が支えになっていると考え、思わぬ落とし穴に陥る危険がある。「共通

するもの」が多くなればなるほど、またその規則性が発見できればできるほど、「教員－学生」は対称的な関係へと近づいていく。それに伴い、お互いを理解できる度合いは高くなり、相手にどう理解されているかわからないという不安も減少する。「共通するもの」の共有こそが、コミュニケーションが成立する大切な要件となるのである。このようなコミュニケーション観から導き出されるのは、他者に向かって話しかけているように見えて、実は本質的に自己となら変わることはない存在への語り、つまり対話というよりも独話と呼ぶべき閉じたコミュニケーション形態である (柄谷 1992)。「自己と他者とのあいだに「共通するもの」があるがゆえにコミュニケーションが成り立つ」とする立場は、転倒した見解を抱いているにすぎない。というのは、「共通するもの」は、コミュニケーションを可能にする前提ではなく、むしろそれが成立したことを受けて事後的に見出されるものであるからだ。

「教員－学生」の関係が、対話ではなく独話であるならば、規則を共有しない〈他者〉と出会う契機を欠いてしまう。〈他者〉と出会わない限り、大学は単に教員や大学生という所属を示す場にすぎず、大学内では自己意識の範疇でしか相手との関係が規定されない。このような状態になってしまえば、学生の関心は大学外に向き、そこでの意義が総じて大きさを増す。自己意識の延長の域を出ない〈他者〉のみままであると、いつまでも大学生は格好の批判対象となったまま、学生のアイデンティティ形成をより困難にしてしまうだろう。

では、〈他者〉と出会うためには、どのように態度を変更すればよいのであろうか。効果的なのは、「教員－学生」の関係を「教える－学ぶ」という位相へずらし、〈他者〉と出会う可能性を模索する方法だ。教える立場に立つこととは、自分が語ったことを自らの意識＝内面で決定できない状況に身を置くことを意味する (柄谷 1992)。相手がこちらの意図とは異なった解釈をする事態は常に存在し、自分の内的基準によって推し量ることのできない〈他者〉は存在する。「共通するもの」をもたないという前提に立ち、理解してもらえるように教えて、理解できるように学ぶ。そうすることで〈他者〉は存在可能となる。「共通の規則」をもたない〈他者〉とのコミュニケーションは、「教える－学ぶ」という関係を基に成立し、ここでは、自己と他者のあいだに架橋しえぬ非対称性が存在している。相手の存在を部分的に切り取るのではなく、総合的に位置づけることで、多元化した自己を支える軸足は「開かれた自己準拠」となるであろう。

だが、「教員－学生」という関係から完全に離脱はできない。両者のあいだに〈他者〉を絶えず喚起できるよう意識を向けて関係を築くことが重要だ。ときには教員として求められる役割もあるだろうし、あるときにはその役割から距離をとる必要もある。まずは単なる定式化された知識を伝達する「教員－学生」関係から脱却し、学生がアイデンティティを形成できるように、大学内で開かれた関係を築けなければならない。教員と学生双方にコミュニケーションの機会が開かれていれば、学生の大学に対する帰属感が高くなり、帰属感を有した学生が集まるコミュニティとしての役割を大学は果たせるだろう⁶⁹。もちろん、教員と学生との間における開かれたコミュニケーションは、大学というコミュニティが成立する要件の一つにすぎない。

大学への帰属感を、学生生活における様々な活動を通じて成立する幅広いものとして捉えるとき、大学に帰属感を見出だした学生が集まるコミュニティとしての機能を大学はもつ⁷⁰。そうであれば、

たとえ、教員と学生の間で共通する目的、すなわち教養教育や人間形成という目的が無かったとしても、大学におけるコミュニティは形成されるのである（武内ほか 2006）。このような「コミュニティとしての大学」（喜多村 1993）が期待されるなかで、河地（2005）が言うように、学生が自分を肯定的・積極的に受け入れるとともに、自分の欠点や弱点を含めて、各自が自分にどのくらい満足し、自分の能力をどのくらい信じられるようになるのか、自信力をつけていくようにすることが重要である⁹⁾。加えて、大学に対する帰属への距離感をどのようにとるのかも重要となってくる。帰属感が高いほど、現在に対して前向きである反面、コミュニティへの同一性が高まり、そこでの充足のみを求めてしまいかねない（武内ほか 2006）。学生が「自分に適した帰属感」を得てアイデンティティを形成できるよう、大学はいかにその役割を担えるコミュニティであるのかが問われている。

注

- (1) 武内はカレッジ・インパクト研究によって提示された分析図式を参考にして、学生の社会化の成果を規定する図式を作成した（武内 2008）。本稿では、武内によって整理された分析図式を参考にした。
- (2) 片桐（1998）は、若者のボランティア志向の底には、「結果がすばやく効果的に見えることをしたい」という意識があると指摘する。すばやく（Fast）、効果的に（Efficient）、目に見える形で（Visible）、この三つの行動基準の頭文字をとって、FEV 基準と名づけた。
- (3) 第7回世界青年意識調査（内閣府政策統括官 2004）によれば、「友人や仲間といるとき」に充実していると感じると回答した割合が最も高い。
- (4) 都市部を中心とした若者の意識と行動特性とを1992年と2002年との比較から変化を調査した結果では、親友が3.8人、仲の良い友だちが14.7人と一定数を保ち、親友がいないと回答した人の割合は減少していた（福重 2006）。また、第7回世界青年意識調査では、日本の青少年の「親友の数」は調査対象となった諸外国と比べても、決して低いほうではなく、悩みごとを相談する相手に「友人」を選んでいる割合も高い（内閣府政策統括官 2004）。このことから、友人関係が軽視されているわけではないと言える。
- (5) 大学が生活全般を通じて学生を教育するというアメリカのリベラルアーツカレッジから始まった大学のコミュニティ機能は、1960年代以降に「学生の成熟度の進行、学生の集団の多様化、大学へのロイヤリティの喪失、大学の非人格化」という形で、学生の態度や行動に生じた変化によって、「コミュニティ喪失」として、その意味が新たに問われることとなった（喜多村 1993）。
- (6) 大学でのコミュニケーションをもたらす活動と思われる、学業、部・サークル活動、交友関係、三つの活動のなかで、比重を高く置く活動が多ければ多いほど、大学の雰囲気満足する（帰属感が高い）という結果が得られている（武内ほか 2006）。実際に、これらのうち一つだけに打ち込んでいる学生は少なく、比重の置き方は異なるものの、ほとんどが複数の活動に関わっている。
- (7) 同志社大学では、2004年度より文部科学省特色ある大学教育支援プログラム事業に採択された「大学コミュニティの創造プロジェクト」を始動している。キャンパスを一つのコミュニティとし

で自覚的に形成していくことで、学生が抱える課題を克服していくとともに、「インキュベイト」 「共存・交流」 「成長・拡がり」 の三つのプロセスを通じて、学生に必要な自律的成長を促すという狙いがある (同志社大学 2004)。具体的には、就学支援として有効であるだけでなく、社会性や責任感の涵養と、帰属意識を高める効果がある。

参考文献

- 浅野智彦, 2006a, 「若者論の失われた十年」 浅野智彦編『検証・若者の変貌——失われた10年の後に』 勁草書房, 1-36.
- , 2006b, 「若者の現在」 浅野智彦編『検証・若者の変貌——失われた10年の後に』 勁草書房, 233-60.
- 独立行政法人日本学生支援機構, 2006, 「学生ボランティア活動に関する調査報告書」.
- 土井隆義, 2004, 「個性」を煽られる子どもたち——親密圏の変容を考える」 岩波書店.
- 同志社大学, 2004, 「大学コミュニティの創造プロジェクト」
(<http://www.doshisha.ac.jp/academics/activity/tokushoku/pdf/2004naiyo.pdf>)
- Erikson, E. H., 1963, *Childhood and society*: W. W. Norton. (=1980, 仁科弥生訳, 「幼児期と社会 2 (第2版)」 みすず書房.)
- 福重清, 2006, 「若者の友人関係はどうなっているのか」 浅野智彦編『検証・若者の変貌——失われた10年の後に』 勁草書房, 115-50.
- 原田隆司, 2006, 「ボランティア活動からみた若者論の試み」 関西社会学会編『フォーラム現代社会学』 第5号: 16-24.
- 橋元良明, 2005, 「パーソナル・メディアの普及とコミュニケーション行動」 竹内郁郎・児島和人・橋元良明編著『新版 メディア・コミュニケーション論Ⅱ』 北樹出版, 326-45.
- 岩田考, 2006, 「若者のアイデンティティはどう変わったか」 浅野智彦編『検証・若者の変貌——失われた10年の後に』 勁草書房, 151-89.
- 柄谷行人, 1992, 「探求Ⅰ」 講談社.
- 笠原嘉, 1977, 「青年期——精神病理学から」 中央公論社.
- 片桐新自, 1998, 「現代学生気質——アンケート調査から見るこの十年」 『関西大学社会学部紀要』 第30巻第1号: 1-46.
- , 2003, 「停滞社会の中の若者たち——収斂する意識と「まじめ」の復権」 『関西大学社会学部紀要』 第35巻第1号: 57-97.
- , 2009, 「不安定社会の中の若者たち——大学生調査から見るこの20年間」 世界思想社.
- 河地和子, 2005, 「自信力が学生を変える——大学生意識調査からの提言」 平凡社.
- 経済企画庁国民生活局, 2001, 「平成12年度 国民生活選好度調査」 財務省印刷局.
- 城戸秀之, 1993, 「消費記号論とは何だったのか」 小谷敏編『若者論を読む』 世界思想社, 86-109.
- 喜多村和之, 1993, 「コミュニティとしての大学」 本間長世編『アメリカ社会とコミュニティ』 日本国際問題研究所, 207-24.

- 児美川孝一郎, 2006, 「若者とアイデンティティ」法政大学出版局.
- 栗原彬, 1981, 「やさしさのゆくえ=現代青年論」筑摩書房.
- 松田美佐, 2000, 「若者の友人関係と携帯電話利用——関係希薄化論から選択的關係論へ」日本社会情報学会「社会情報学研究」No.4:111-22.
- 宮本みち子, 2004, 「ポスト青年期と親子戦略」勁草書房.
- 溝口慎一, 2001, 「自己評価を規定する自己とそれに関連する大学生的文脈」『大学生の自己と生き方——大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学』ナカニシヤ出版, 69-96.
- , 2002, 「大学生の憂うつ——ユニバーシティ・ブルー」『大学生論——戦後大学生論の系譜をふまえて』ナカニシヤ出版, 51-66.
- , 2004, 「現代大学生論——ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる」日本放送出版協会.
- 内閣府政策統括官, 2004, 「世界の青年との比較からみた日本の青年 第7回世界青年意識調査報告書」国立印刷局.
- 中西新太郎, 2004, 「若者たちに何が起きているのか」花伝社.
- 中野取, 1985, 「まるで異星人——現代若者考」有斐閣.
- 西平直, 1993, 「エリクソンの人間学」東京大学出版会.
- 小此木啓吾, 1978, 「モラトリアム人間の時代」中央公論社.
- 武内清, 2008, 「学生文化の実態と大学教育」日本高等教育学会編「高等教育研究」第11集:7-24.
- ・浜田幸司・大島真夫・伊藤素江, 2006, 「コミュニティとしての大学——21大学調査から」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』No.58:309-12.
- 辻大介, 1999, 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛編「子ども・青少年とコミュニケーション」北樹出版, 11-27.
- 上野千鶴子, 2005, 「脱アイデンティティの戦略」上野千鶴子編「脱アイデンティティ」勁草書房, 289-321.
- 渡部真, 2002, 「青年期を説明する語彙」『ユースカルチャーの現在——日本の青少年を考えるための28章』医学書院, 22-7.
- , 2005, 「「モラトリアム青年肯定論」について」渡部真編「現代のエスプリ」第460号:5-9.
- 山下恒男, 2008, 「発達論としてのアイデンティティ論——エリクソン理論を再考する」日本社会臨床学会編「心理主義化する社会」現代書館, 245-98.
- 全国大学生協組合連合会, 2008, 「CAMPUS LIFE DATA 2007」.

(いわかわ・こうじ つくば国際大学社会福祉学科)

College Students and their Identity Formation: Beyond the Development Theory Normality

Koji Iwakawa

Through their college life, students face a number of occasions to make decisions critical for their entire life. Being a transitional stage to adult, college period means an important step for students to form his/her identity by establishing a firm personal standing in their own context. The identity concept advocated by Ericsson is congruent with the development theory normality, and has been established as the fundamental tool to signify the developmental stage of college students. In the rapidly changing society of today, however, typical patterns of college life offered by the development theory can no longer be taken for granted, and there is growing need to explore the novel adjustment patterns to cope with the rapid social change.

Students are students because of their college enrollment; it is therefore vital to grasp, as the whole, students' thinking and behaviors in the collegiate context. In this paper, the focus will be placed on the quality of interpersonal relationship among students and its influence on identity formation. Emphasized is the interpersonal relationship outside the college, through which the student-teacher relation is semantically reviewed. I argue that promoting teacher-student relation in such a way as to illuminate constantly the presence of others, not internalized in their ego, should help students build more concrete identity.

Key words: College students, Identity, Interpersonal relationship